

長い間、演劇をやっていると、学生だったお客さんも社会人になります。そして手紙をもらったりします。高校の時に僕が作った演劇と出会い、やがて、高校の教師となり、さらに演劇部の顧問になったお客さんから、僕の戯曲の上演許可を求める封筒が届きました。

芝居のタイトルを書いた一枚の書類と長い手紙が同封されていました。

その手紙は、「鴻上さんは、今でも無意味な校則に怒ってますか？」という文章で始まっていました。

そして、自分も高校時代、「髪の毛オンザ眉毛」だの「スカートの丈、ひざ下10cm」のバカバカしい校則に怒っていたけれど、「教壇に立つようになって初めて、その規則の意味が分かります」と続いています。

高校時代、僕は恥ずかしいことに生徒会長に立候補して、「無意味な校則を変えるために、他の高校の生徒会と協力してがんばる」という派手な公約で当選しました。

当選した日にすぐに生活指導部長に呼ばれて「公約のようなことはしないように」と釘を刺されました。

「はい」と返事して、すぐに僕は他の生徒会長とコンタクトを取り始めました。友達の友達の友達のツテをたよって、さまざまな高校の生徒会長の家に、直接、電話しました。手紙を高校の生徒会宛に送ると教

師によって開封されて、握りつぶされると考えたのです。

僕は愛媛県出身なのですが、困ったことに愛媛県は横に長い県で、端から端まで行くのに、電車で六時間以上もかかるのです。しかたがないので、僕は土日を使って、愛媛県をくまなく回りました。

そして半年ほどして『愛媛県高校生徒会連合』というものを創りました。県下の七割ほどの高校、約三十校が参加しました。

すべて教師には内緒の行動でした。

設立総会には、生徒会長や副会長が五十人ほどが集まりました。僕たちは高校生だけで旅館に泊まりこんで、お互いの校則や文化祭、体育祭について話し合いました。

こう書くと、世代によっては、学生運動のようなものを想像するかもしれませんが、本人たちにとっては、修学旅行の夜の続きでした。僕は、作品の中で「学生運動」を取り上げるので、時々、誤解を受けますが、学生運動に完全に遅れてきた世代です。

いえ、そもそも、「学生運動」という言葉も、説明が必要でしょう。

今回出演している十八歳の森田彩華ちゃんは、「学生運動つて、『校内美化運動』とか『ゴミゼロ運動』とかのひとつですか？」と真剣に聞いていました。誰も語らなければ、歴史は切断されるのです。

一晩、温泉に入りながらとことん話し合い、知ってみれば、校則なんてものも根拠が、実にいい加減だということに驚きました。

ある高校は、女子生徒のストッキングの色は肌色だけで、黒色は「娼婦の色だ」と教師から言われたと

報告しました。ところが、そのすぐ隣りの高校ではストッキングは黒色しかダメで、それは黒色が「高校生らしいから」と言われたと報告しました。ということは、「高校生らしい」っていうことは「娼婦らしい」ってことかと僕たちは笑いあいました。二十年ほど後の「援助交際」の出現を予言したかのような規則だった……はずはないのです。

この討論の後、僕は高校に戻ってすぐに生徒会通信を発行して、「いかに校則が無意味で根拠のないものか」を具体的な例をあげて説明し始めました。そして、すぐに発行を生活指導部長に止められました。生徒会の中でも、僕の〈過激〉な方針に反発して、ほとんどの人が離れていきました。

生徒会長の任期が切れた時、僕は「公約違反」だとあちこちから責められました。けれど『生徒会連合』のことを言うわけにはいきませんでした。僕は黙って、二代目のメンバーに希望を託しました。

卒業ぎりぎりまでかかつて、『生徒会連合』の議論を集めた本を作りました。各校の規則、文化祭、体育祭を一覧にして、校則を廃止した学校があれば、その記録も載せました。

卒業式の前日、突然、生活指導部長から呼び出しを受けました。彼は「××高校の生徒が『生徒会連合』というものの会議があるんで出席していいか?」と問い合わせたらしいんだが知ってるか?」と僕に聞きました。二代目のメンバーのうち、事情がよく分かってない生徒が、直接、教師に出席の許可を求めたのです。

僕は「なんのことでしょう?」とずっとスツとぼけました。けれど、それで生徒会連合は終わりました。残ったのは、どこにも配れなかった数百冊の本でした。二カ月かけて作った本は、その当時の書記だった

女の子がとりあえず引き取り、やがて散逸しました。

今でも僕は「無意味な校則」に怒っています。そして、手紙をくれた人が、現場の教師として、「校則が必要な生徒もいるんです」と書くリアルティーも分かるつもりです。ですが、今でもやっぱり僕は怒っています。

手紙の人は、最後にこう書きました。

「今でも、私は生徒に対する扇動者せんどうしゃでありたいと密かに思い続けています」
けれど、生徒に制服の自由化の話題を振っても乗ってこず、多くの生徒は制服の存続を強く希望するのだとつけ加えるのです。

卒業する時、「祭りの準備だけして、祭りはとうとう始まらなかった」——僕はそんな気持ちでいました。そして、祭りなんて本当に始まることはないんだと、心の奥底では思っていました。

ですが今なら、祭りの準備ができただけでも幸福だったと分かります。

祭りのない人生を送ることはあっても、祭りの準備さえない人生は送りたくないと思っからです。

「扇動者」でありたいと密かに思いながら、毎日、校則を指導する教師の心の中を僕は想像します。

扇動者になり切ることにはついになくても、扇動者でありたいと思いつけることは、教師の人生を豊かにするのか、厳しくするのか。

今日はどうもありがとう。こゆつくりお楽しみ下さい。んじゃ。

鴻上尚史